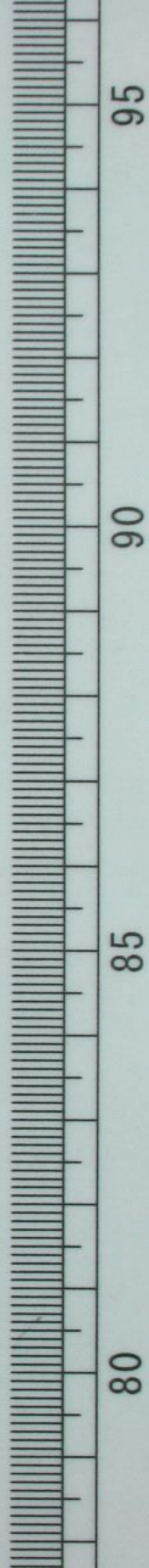




桂雲集類題

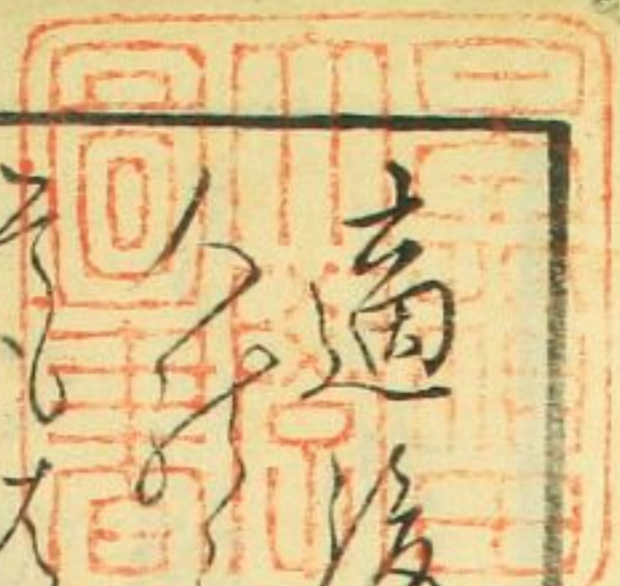
~ 4  
2130





利
2/30

利4  
門號 2.130  
卷



通後世のいふよし  
しふのいふよし  
そとをいふよし  
牛の糸のいふよし  
むねのいふよし  
うりしよのいふよし  
えのいふよし



明治三十四年四月五日  
藤野 漸  
式奇贈

くまぬそい〜おや〜はあまひめを  
は遺つ娘をせふ中へ傳へしうの上子のれを  
山奴〜の輯藤はまお母やふかせ〜か  
りま〜しゆと遺つて門の内ぬる物  
し〜危れきお母〜  
たに輯藤ま〜の  
とら朽ぬ〜とそあ

序一

もおぬ〜のれ〜  
昔を百歳と教へ〜  
門子遊入るを初〜  
すめ〜情白れお母〜  
むき付るち〜あま〜  
くけ〜記名藤をま〜  
とれおのれ〜あ急〜

礼より一考に於て輯原と然らざるを  
考をそとく此頃貞祐の世に於て  
そとく考をそのあつたをそとくして  
本にちりたるものありて不修りて  
考と改めたるものありて考のあり  
と考のありと

之志壽長収識

序二

春時  
長壽長収識

桂雲集類題

春部

年内立春

年六つねむくはるの月よりあはれ春は来分  
 られはる年の字をて松し緑は春は来ん  
 年六つねむくはるの月よりあはれ春は来分  
 雷より春の道は花は春の道は花は  
 冬枯の梢のふれは花は春の道は花は  
 春は来んは春の道は花は春の道は花は

桂雲 一

藤年、深氏遺愛之記

祇園社奉納

神代より春は来んは春の道は花は春の道は花は  
 雷は明くは春の道は花は春の道は花は  
 春は来んは春の道は花は春の道は花は  
 春は来んは春の道は花は春の道は花は  
 春は来んは春の道は花は春の道は花は

試筆

明きるるぬ雛のさかぬ初ひよて百子ゆきて春風初ん

種とりてはは詞の林も、田を初くく花は春の初

節もあはさきまきて世の人乃たえらるる春のさき

門の春はあはさぬ初れ初語さゆきし初を原の袖

衣をけし枯雪の小舟初れもさき初る春の初れ

花よりの初の子種初れもさき初る春の初れ

出る日の初より春の初れ初れもさき初る春の初れ

春の初れ初より初る春の初れ初れもさき初る春の初れ

桂雲 二

初春

初春月

早春雪

関路早春

池早春

春風水解

池水解

子日

正朔子日

お板下を雪消ぬ関路の松村をさき春の初風

おの池の心は打たれて花はさき初る波の春風

おはる初れ水は初る春の初風初れもさき初る春の初風

さき初る初れ水は初る春の初風初れもさき初る春の初風

打たれて初る初れ水は初る春の初風初れもさき初る春の初風

子日は初る初れ水は初る春の初風初れもさき初る春の初風

春風の初れ水は初る春の初風初れもさき初る春の初風

子日は初る初れ水は初る春の初風初れもさき初る春の初風

子日催興

霞

朝霞

山霞

嶺樹霞

桂雲 三

小ね原消あぬきり十五うねほえん花結きあふ川  
白雲のよよきりし山姫は花衣きりあふ那  
巻向の松あふきり雪野のうらり初より朝やあふ  
縦あり月の光結し朝やあふ明世は花衣きりあふ  
出る日のまほはのうらり初より朝やあふ  
春な花あふきり山霞を先日のあふ  
さけりつるあの上り山霞を先日のあふ  
朝日朝やあふ山霞を先日のあふ

松上霞

岡霞

原霞

行路霞

海上霞

この霞はあふきり山霞を先日のあふ  
お飯や花のあふきり山霞を先日のあふ  
この原やあふきり山霞を先日のあふ  
ゆきやあふきり山霞を先日のあふ  
朝やあふきり山霞を先日のあふ  
朝やあふきり山霞を先日のあふ  
あふきり山霞を先日のあふ  
朝やあふきり山霞を先日のあふ





残雪

松残雪

餘寒

餘寒月

餘寒雪

餘寒風

深溪餘寒

桂雲 五

とわつとよふは春をぬきてまじりぬる雪の白  
つねにわたりぬ波りたゞの松はも信よりぬる雪  
まじり年の雪は消えぬ松はぬれぬ雪  
枯草の玉江の氷も消えてもぬれぬ雪  
さえりつる山春も白雪のふきぬれぬ雪  
薄氷も消えてもぬれぬ雪  
まじりぬる雪は消えぬ松はぬれぬ雪  
とけぬ雪は消えぬ松はぬれぬ雪

二月餘寒

住友友信ありてぬれぬ雪は消えぬ松はぬれぬ雪

梅始実

水も瀬冬に梅始実ぬれぬ雪は消えぬ松はぬれぬ雪

梅盛開

渡邊梅風

ちよと梅の白かきぬれぬ雪は消えぬ松はぬれぬ雪

ちよと梅の白かきぬれぬ雪は消えぬ松はぬれぬ雪



春草短

雨中春草

早蕨

春月

里におれて野とあり庭のよめまよひたりも淋寂は秋風  
 さきよはたけのふれ葉は春のよめをのちのほのけはせし  
 春あけららの松の下草よ一ねるるよおひかふら  
 ちとらわらぬるおれ下草のつりあはるよ春あけら  
 けくくよ春あけらぬる我神をたぐひせよ春あけら  
 ゑのちてあけらけはるよ春あけらぬる初蕨は  
 あさうつよよはれらるよ春あけらぬる初蕨は  
 ねのちてあけらけはるよ春あけらぬる初蕨は

桂雲七

霞中月

霞滿月

春夕月

かきて我はのほろ老のちるあさよと春あけらぬる  
 月よ春あけらぬる昔の春もよと春あけらぬる老のちるあさ  
 宿建都よと春あけらぬるあさよと春あけらぬる老のちるあさ  
 花の書に勝るるよ春あけらぬるあさよと春あけらぬる老のちるあさ  
 春あけらぬる月よ春あけらぬるあさよと春あけらぬる老のちるあさ  
 月よ春あけらぬるあさよと春あけらぬる老のちるあさ  
 此のちると春あけらぬるあさよと春あけらぬる老のちるあさ  
 ねのちてあけらけはるよ春あけらぬる初蕨は

海邊春月

和風のふと春のよはの波の上はやあかきと出る月影

春曙

かきふく浦の初春のうららかなるまの明の

誰中の世とてわが世は別れゆくえとてうがしは春の曙

静にさうも無情な位はのわがうらむまの心反

春山暁

あまそよ月とたふれはるるまのあつらふの春の暁

春雨

春雨の音はかきまてとらふ静なき高の朝のよ水

あまそよ月とたふれはるるまのあつらふの春の暁

古郷春雨

新住て長きの人れ春がしとらふ里は春のなつあけ

掛雲 八

雨中春雨

春雨の音はかきまてとらふ静なき高の朝のよ水

出栖春雨

春雨の音はかきまてとらふ静なき高の朝のよ水

旅春雨

春雨の音はかきまてとらふ静なき高の朝のよ水

帰鷹

秋の海乃を後れ暮のあけゆくはるる眼も春の原が

雲端帰鷹

とらふ静なき高の朝のよ水

霞中帰鷹

春雨の音はかきまてとらふ静なき高の朝のよ水

深夜帰鷹

春雨の音はかきまてとらふ静なき高の朝のよ水

帰鷹遠

春雨の音はかきまてとらふ静なき高の朝のよ水

去鴈遠  
春駒  
雲雀  
野雲雀  
呼子鳥  
櫻  
山寒花正  
待花

去鴈遠 遠路の空を渡る鳥は 雲の間に身をまかせ  
 春駒 春の空を飛ぶ馬の如き 雲の間に身をまかせ  
 雲雀 雲の間に身をまかせ 春の空を飛ぶ鳥  
 野雲雀 野の空を飛ぶ鳥の如き 雲の間に身をまかせ  
 呼子鳥 呼子鳥の如き 雲の間に身をまかせ  
 櫻 櫻の花は 雲の間に身をまかせ  
 山寒花正 山寒花は 雲の間に身をまかせ  
 待花 待花は 雲の間に身をまかせ

桂雲九

待山花  
尋花  
裁花  
長樂寺子持  
花柳文喜私

待山花 泊瀬の花は 雲の間に身をまかせ  
 尋花 尋花は 雲の間に身をまかせ  
 裁花 裁花は 雲の間に身をまかせ  
 長樂寺子持 長樂寺子持の如き 雲の間に身をまかせ  
 花柳文喜私 花柳文喜私の如き 雲の間に身をまかせ

祇園毒材の花らんこりりたるはあき

人々のこゝろ吹成乃青いこゝろよれきり花の下陰

の巻

ちよふまふじんらつ花も本は乃雪の流る馬とじ

花盛用

花は今のまきよとてちよふこゝろまき葉をそた  
あはらう乃花のまき花も清て雪のたきものうき

山花盛

すけはききまふまふのまき花のうき花も白雪  
一本の松をまきまき水鳥のまき花のうき花の白皮

桂雲十

夜思花

よるすうふの中をまき花のねる花もあき

雨中見花

らるるのまき花のうき花のあき花もあき

折花

あき花のまき花のうき花のあき花のうき

まき花のまき花のうき花のあき花のうき

あき花のまき花のうき花のあき花のうき

あき花のまき花のうき花のあき花のうき

依花待月花もまき花のうき花のあき花のうき

月花花もまき花のうき花のあき花のうき

花似雲

花雲

咲くは枝にありて乃極む下はきぬき雲よ  
 立りてあはれは匂ひはほめて花はさかぬ顔の白き  
 よあはれは匂ひはほめて花はさかぬ顔の白き  
 幾とも花のあつひはるわ様をよに顔の白き  
 雲よとせをよにほめてはほめてはほめては  
 雲よとせをよにほめてはほめてはほめては  
 よきよよけ花はあはれはほめてはほめては  
 花はあはれはほめてはほめてはほめては

花似雲

花下送日

花下忘ぬ  
 薄暮花  
 花下鐘聲  
 金龍寺

うつろをちうはつひは星の夜の旅をわらわ  
 陰うらやのさうはうらやとわらわ花はわらわ  
 花はあはれはほめてはほめてはほめては  
 金龍寺

山花  
 柿草花歌をうけて吉田尚成うらやわらわ



遥望山花 芳野山花  
 山路花 誠やうと  
 山中花夕 志何れ  
 花移水 ころね  
 河邊花 枝の  
 海邊夕花 ころね  
 古郷花 ころね  
 山家花 ころね

田家花 朝人  
 閑庭花 門  
 閑居花 菫  
 松間花 幾  
 竹間花 立

依花待人 行人あるに花は月とあはれと笑ひ来り花をよめく  
 花笛客 花は月とあはれと笑ひ来り花をよめく  
 花鏡 花は月とあはれと笑ひ来り花をよめく  
 花香 花は月とあはれと笑ひ来り花をよめく  
 寄花燈 花は月とあはれと笑ひ来り花をよめく  
 花のりくはあまきくをきくとして

此のよに花はあまきくをきくとして

遠花誰家 花は月とあはれと笑ひ来り花をよめく  
 無風花散 花は月とあはれと笑ひ来り花をよめく  
 花落客稀 花は月とあはれと笑ひ来り花をよめく  
 落花 花は月とあはれと笑ひ来り花をよめく  
 落花風 花は月とあはれと笑ひ来り花をよめく

水邊落花  
曉庭落花  
閑中落花  
花終殘  
名所花  
春心寄花  
花時鞍馬多  
寄花述懷

おもひに思ひぬ花の志は水に散るんはうつらうつら  
多明の舟と楳の木の下より光を花に透しあは  
花さうとらねわ富はあまをな待雪の色をくあ  
あまをね花はまの木の根あり花内よりいふかじ  
泊瀬の舟きり下は昔風を盛るうな花は乃をま  
ちうわらうらのそなぬ新は花に雪さう思ひあ  
花あれはあまの言の垣のうしはあまのあま  
花さううためえしとちあめありてはあまのあま

桂雲 十四

花年 新供の命

花契多春  
花契多年  
寄花祝

昔はあまを昔へあまを人のよき花はあま  
花さうう雪の中あらね花さううのそなぬ新は  
このあまをね花のそなぬ新はあまのあま  
今より花年をあまのあまのあまのあまのあま  
花はあまのあまのあまのあまのあまのあま  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあま  
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

春山興

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあま

三月三日  
三月三日  
三月三日  
三月三日  
三月三日  
三月三日  
三月三日  
三月三日  
三月三日  
三月三日

御  
御  
御  
御  
御  
御  
御  
御  
御  
御

遊  
遊  
遊  
遊  
遊  
遊  
遊  
遊  
遊  
遊

桂雲十五

晴又遊絲  
董  
庭董葉  
雨中蛙  
苗代  
晴又遊絲  
董  
庭董葉  
雨中蛙  
苗代

雨後苗代  
岡躑躅  
松下躑躅  
杜若  
款冬  
款冬露繁  
杜款冬  
橋辺款冬

与はらの畦とあまうさなうて水さそふらまのあま  
 鳴き守思のうらうらあなれ集まふらのとれつら  
 下咲ふの時ふく林のさよ松いつれもまの春の風お  
 今こまの海のゆらね木陰を折るくふふあうらう  
 こころのさうらねあうてふ歌ようこらね花咲く山吹の色  
 あなれは妹とあうそふ花あうふあうあなれあうてふ森の  
 山吹のさうら水うらのあう花うけうけう井のあなれ橋

岸款冬  
藤  
松藤  
橋上藤  
池藤  
龍下藤花

こころのさうらあうてふ歌ようこらね花咲く山吹の色  
 あなれは妹とあうそふ花あうふあうあなれあうてふ森の  
 山吹のさうら水うらのあう花うけうけう井のあなれ橋  
 こころのさうらあうてふ歌ようこらね花咲く山吹の色  
 あなれは妹とあうそふ花あうふあうあなれあうてふ森の  
 山吹のさうら水うらのあう花うけうけう井のあなれ橋  
 こころのさうらあうてふ歌ようこらね花咲く山吹の色  
 あなれは妹とあうそふ花あうふあうあなれあうてふ森の  
 山吹のさうら水うらのあう花うけうけう井のあなれ橋

滋下紫藤

浦藤

暮春

暮春山

江上暮春

暮春浦

暮春藤

こゝに藤の葉の青いよるをみれば  
海童の所の波もあはれし  
光るる谷のつらき花も  
さしをりて古の花も  
よもぎの花は春の  
とれぬて花も  
あはれし花の浦の  
花の春は

桂雲 十七

舟中暮春  
疎鶯

惜春水一

惜春不箇

三月盡

消ゆる舟の末の  
今も又雪の  
咲ゆる花の  
ちる花も  
昔の春は  
とめは  
とめは  
とめは

春雲

詩之合とるよりしをいひて人のこゝろ

あつちまの花のよきめは春雲より梅の如く顔の白き

春夜訪友

春浦

山陰も梅も雪とまじりて月も友とまじりて

細子の波乃け縋ひて神の意もゆりて春の浦

春鳥

秋あつちまのよきより梅の花より白きゆりて

春歎

里れども野の牛も春に身を引縋れよまじり

春虫

春祝言

咲花よよきより梅より白きゆりて

緑のよよきより梅より白きゆりて

桂雲集類題

夏部

首夏風

なほさきつ訓し昨日花のつし袖はさかしの風を

首夏雨

かこふりの天のく山降るは雨さかしの夜衣は

首夏朝露

なほさかしの緑の葉は涼くかかふは朝露

更衣

なほさかしの夏衣は涼くかかふは更衣

なほさかしの夏衣は涼くかかふは更衣

朝更衣

なほさかしの朝更衣は涼くかかふは朝更衣

桂雲九二十

谷餘花

なほさかしの春よさかしの谷は中へ流る物思ひのふ

なほさかしの春よさかしの谷は中へ流る物思ひのふ

なほさかしの春よさかしの谷は中へ流る物思ひのふ

なほさかしの春よさかしの谷は中へ流る物思ひのふ

山新樹

なほさかしの山新樹は涼くかかふは山新樹

卯花

なほさかしの卯花は涼くかかふは卯花

卯路卯花

なほさかしの卯路卯花は涼くかかふは卯路卯花

卯花卯路

なほさかしの卯花卯路は涼くかかふは卯花卯路



卯花作塙

籬卯花

葵

挿葵

郭云

久しかりし花は卯花に似たり  
卯花のまゝに栽くは其のまゝに  
栽くは其のまゝに栽くは其のまゝに  
栽くは其のまゝに栽くは其のまゝに  
栽くは其のまゝに栽くは其のまゝに  
栽くは其のまゝに栽くは其のまゝに  
栽くは其のまゝに栽くは其のまゝに  
栽くは其のまゝに栽くは其のまゝに  
栽くは其のまゝに栽くは其のまゝに  
栽くは其のまゝに栽くは其のまゝに

待郭云

人傳郭云

獨岡郭云

近岡郭云

両方郭云

雲間郭云

雲外郭云

此の如くは保元平治の事  
春秋の志に記す所の如く  
是の如くは保元平治の事  
春秋の志に記す所の如く  
是の如くは保元平治の事  
春秋の志に記す所の如く  
是の如くは保元平治の事  
春秋の志に記す所の如く  
是の如くは保元平治の事  
春秋の志に記す所の如く





五月の流しを谷川梢に懸け彼より  
山五月雨 晴るのこぞおれ長し雨ふらきならぬとこれの  
杜五月雨 五月の雨は好むに朽ちる草のしきもあらず木枯れ杜  
橋五月雨 加ふべきは雨と懸て五月の雨は流中なる流の舟橋  
江五月雨 水戸に入るの昔の葉をさしてよほのあつさふれのみ  
河五月雨 いくらの雨れあらず小橋津川おれおれ水戸にさす  
浦五月雨 浦にさすおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ  
浦五月雨 浦にさすおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

菴五月雨 五月の雨は好むに朽ちる草のしきもあらず木枯れ杜  
船五月雨 五月の雨は好むに朽ちる草のしきもあらず木枯れ杜  
渡り水郭 五月の雨は好むに朽ちる草のしきもあらず木枯れ杜  
夏月 五月の雨は好むに朽ちる草のしきもあらず木枯れ杜  
夏月似秋 五月の雨は好むに朽ちる草のしきもあらず木枯れ杜  
雨後夏月 五月の雨は好むに朽ちる草のしきもあらず木枯れ杜

夏月易明

涼き風をよめて葉のそと安き明らな月

夏曉月

物あつた短衣の影をわけてぬおのり明の月

夏山月

おのりきりもまねれお室山とけぬ氷さつり月影

夏草深

あこから人もなほおのり麻の影をわけてる草

桂雲 廿五

野夏草

かきこたえ秋の影をうたむる草また結をよほ

照射

涼き波をすべのあぬ月影をけりてあつた

嶺照射

あつた影の通ぬりまき人の影をおくつねる

深夜鶉川

夕やこの月も成てなぬ川影も陰よかす

連夜鶉川

あつた影も成てなぬ川影も陰よかす

鶉川欲曙　　るきまのむ松川の精細に　くははるが都は波の舟火  
 波然と　あすの業も　あまの川　あまの　あまの　あまの  
 名所鶉川　　夕やうの月の中なる　桂川　あまの　あまの　あまの  
 螢　　河中　あまの　あまの　あまの　あまの　あまの　あまの  
 腐草為螢　　朽を　あまの　あまの　あまの　あまの　あまの　あまの  
 深夜螢　　月あ　あまの　あまの　あまの　あまの　あまの　あまの  
 水邊螢　　あまの　あまの　あまの　あまの　あまの　あまの

桂雲 二十六

花華　あまの　あまの　あまの　あまの　あまの　あまの  
 螢照水草　　あまの　あまの　あまの　あまの　あまの　あまの  
 螢過窓　　あまの　あまの　あまの　あまの　あまの　あまの  
 垣夕顔　　あまの　あまの　あまの　あまの　あまの　あまの  
 蚊遣火　　あまの　あまの　あまの　あまの　あまの　あまの  
 里蚊遣火　　あまの　あまの　あまの　あまの　あまの　あまの

閑居故き  
 蓮  
 氷室  
 名可氷室  
 夕立早返  
 遠夕立

ありは燈をくゆるま川のほとね草の里はる灯  
 衣志新約け夕けの烟く、遠なるを、宿のり火  
 ちのみま菊をちまの立紫、いも、及びね、池渡  
 ちむら山、ぬ先の雪れと、もひらと、雪、谷の白雪  
 いむら山、く、谷、も、て、地、方、ね、雪、て、秋、能、や  
 あらね松、崎、とのちむら、ま、年の、雪、も、ね、秋、く、ん  
 神、ま、り、秋、も、て、ぬ、く、り、は、す、程、な、き、ま、の、能  
 て、秋、り、仲、中、川、を、濁、る、る、夕、立、ま、し、し、水、の、り、の、こ

行路夕立  
 村夕立  
 樹陰蟬  
 泉  
 新泉忘夏  
 水邊納涼  
 船納涼

ぼくも、宿、も、い、ら、ぬ、馬、の、ぬ、れ、お、あ、の、夕、立、の、元  
 ち、り、う、と、これ、の、濁、る、川、の、ゆ、め、の、村、の、夕、立、の、元  
 ち、り、又、り、夕、立、の、樹、の、陰、の、蟬、の、音、の、夕、立、の、元  
 ち、り、ね、と、新、泉、の、た、の、り、の、泉、の、夕、立、の、元  
 ち、り、結、ぶ、り、の、夕、立、の、元、の、中、の、水、の、夕、立、の、元  
 ち、り、ち、り、水、の、夕、立、の、元、の、中、の、水、の、夕、立、の、元  
 ち、り、夕、立、の、元、の、中、の、水、の、夕、立、の、元  
 ち、り、和、の、海、の、沖、の、水、の、夕、立、の、元

松下納涼

志別くして涼引陰とありて志高き山々の松の心

樹陰納涼

谷深き松の下蔭神をてして結ぶる心あけりて

家々納涼

涼引も月を窓に夕影の雪の花垣ならん此れ

竹風夜涼

夏風月夜に竹の心あけりて井の繁葉より涼を

野草秋近

若草あけりて心あけりて今幾日あけりて秋の七葉

草花秋近

初風と秋の葉あけりてきく中、きく妹の心

川夏後

夏も子夏の涼引れ川後川波の現ハ秋風をさく

桂雲 二八

六月後

よりの川をさきさるるも梅麻乃花はあきとせの白波  
きききつて心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて  
心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて  
心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて  
心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて  
心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて  
心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて  
心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて

夏朝天

出らぬ心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて

夏雲奇峰夏

雷とこれに伴きりて心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて

心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて心あけりて



夏夜雨

下むるの朝霧の多う打きやう涼しくくやりの村の  
際多めあまうて落るあはれもまのや乃折の籠裡の光  
流川や流るる水のあまうたねたてなまの袖のきり  
らむ河や夕白のさよふあはれあまの波の初来き  
一りとの標のや乃のしるは丸の風も小はるゆ  
涼らむさき風流の水際よりまのまき波のあまの  
籠裡のまのれりとの田のさくねるねね標のあまの

夏川

夏木

夏鳥

夏虫

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*



新秋露

残暑

七夕

秋あけの初は 露の初は 秋の初は  
けしきめり 露の初は 秋の初は  
夏あけの初は 秋の初は 秋の初は  
なほあけの初は 秋の初は 秋の初は  
天川星の林は 秋の初は 秋の初は  
昔あけの初は 秋の初は 秋の初は  
秋あけの初は 秋の初は 秋の初は

桂雲 三十一

七夕風

野外七夕

七夕風 野外七夕 野外七夕  
あけの初は 秋の初は 秋の初は  
あけの初は 秋の初は 秋の初は  
あけの初は 秋の初は 秋の初は  
あけの初は 秋の初は 秋の初は  
あけの初は 秋の初は 秋の初は

あけの初は 秋の初は 秋の初は  
あけの初は 秋の初は 秋の初は  
あけの初は 秋の初は 秋の初は

萩  
萩風似雨  
曉萩風

流きては是も妹背の中よはる萩風もさう又の川水  
一穂もあらず萩風もあまうはれぬやうな合の虫  
月入ぬ早も今もあつりなき一光也さうな海もあつ  
鶺鴒のさめようねもあつるあつ一穂のさめぬも萩  
さす外の手うらさぬ一ふもあつるねぬぬぬぬぬぬ  
さぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
あつりよきとぬ萩のさめぬさぬ流乃れさぬぬぬぬ  
曉のねぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

曉更萩風  
江邊曉萩  
遠居萩  
笠簾萩  
古初萩  
萩

いさせん夕の揚よ可きれり曉をようねさぬの上を  
おろきう入念の月れ萩もあつる明きき萩の上風  
下つてもいぬふ人のあつるさぬさぬ萩の上風  
さぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
里いぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
志ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
志ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
さぬ萩原ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

秋上露

月もも秋のまの袖よあもさくろけかあれありのた  
ちもも秋の上のまのたけをよ花よまああ  
月もも秋のまの袖よあもさくろけかあれありのた  
園乃名の入りてはるねきまの袖よあああ  
山川のまの袖よあもさくろけかあれありのた  
古のまの袖よあもさくろけかあれありのた  
麻のまの袖よあもさくろけかあれありのた  
女郎花のまの袖よあもさくろけかあれありのた

園秋

秋映水

離下秋

秋空待麻

女郎花

澤女郎花

薄

古初房

薄似袖

すきりて極なり

古のまの袖よあもさくろけかあれありのた  
をよ花よあもさくろけかあれありのた  
あもさくろけかあれありのた  
あもさくろけかあれありのた  
あもさくろけかあれありのた  
あもさくろけかあれありのた  
あもさくろけかあれありのた  
あもさくろけかあれありのた  
あもさくろけかあれありのた  
あもさくろけかあれありのた

菊萱

古のこころをよすもあすあつたのちもあつたけりといふは  
 此のこころは白雲の影をうけたりとて花の影を  
 蘭 秋は先づくも花の影の影も待たぬ  
 草花早 花はまてわらふ朝露とて花の中はまの百草もあつては  
 草花色く 花はまてわらふ朝露とて花の中はまの百草もあつては  
 草花露 花はまてわらふ朝露とて花の中はまの百草もあつては  
 詩歌のまゝにわらふらん  
 野外草花 花はまてわらふ朝露とて花の中はまの百草もあつては

野花苗人 花はまてわらふ朝露とて花の中はまの百草もあつては  
 庭移秋花 花はまてわらふ朝露とて花の中はまの百草もあつては  
 槿 花はまてわらふ朝露とて花の中はまの百草もあつては  
 戶外槿 花はまてわらふ朝露とて花の中はまの百草もあつては  
 露 花はまてわらふ朝露とて花の中はまの百草もあつては  
 野草露繁 花はまてわらふ朝露とて花の中はまの百草もあつては  
 苔徑露 花はまてわらふ朝露とて花の中はまの百草もあつては  
 虫 花はまてわらふ朝露とて花の中はまの百草もあつては

虫怨 蟲之入るを思ふやうも 蒼苔のの 露の命はうらや  
 虫聲非一 鳴虫も子種はうらや 秋の虫の 声はも 花の 命は  
 夕虫 何れかの 命を 契て 夕く 夏虫の 命は 松の  
 草虫 明くした 命を 契て 陰る 命は 虫の 命は 松の  
 閑庭虫 ちの 命の 命は 命は 命は 命は 命は 命は  
 蒼近枕 きうく 命は 命は 命は 命は 命は 命は 命は  
 旅店閑虫 名の 命は 命は 命は 命は 命は 命は 命は  
 名所虫 鳴海野や 命は 命は 命は 命は 命は 命は 命は

廣海の 命は 命は 命は 命は 命は 命は 命は  
 權僧正 随庸乃 命は 命は 命は 命は 命は 命は 命は  
 津之 命は 命は 命は 命は 命は 命は 命は  
 遠近秋風 花の 命は 命は 命は 命は 命は 命は 命は  
 鹿 強枕あり 命は 命は 命は 命は 命は 命は 命は  
 秋の 命は 命は 命は 命は 命は 命は 命は





秋夕傷心

つらき物も忘るゝをみるもまれば思ふの秋の秋は

稲妻

まき霧のちかひは霧きり月影も光るさうさうの稲つ月

秋田

この乃に小田の志あ綴りてきけはつ子よ社内を吹

的途

むさう燈籠出月走る運坂の山成今も弱きう乳

八月廿日定家卿新供の事よ

園駒迎

園の戸乃ひ守秘弱と引て葉月になつた枚の下乃

月

山梨の林の浦の秋の月うらむみあるをたはるゝ

誰り又もきこひつゝはちあふぬ園の秋の秋の月

桂雲 二十七

秋の頃よと侍りし秋の中よ

この心後とん月の高れね夕白のそれの高れ侍り

廣海とて月の夜

廣海は月とれはるる波のうきよのうたはるる

秋待月

出ぬき月より先よすたらくは横きさやよふたの松風

恙んつとよふさるるの山影はひつゝの月とつねるさ

月出清風来

誰よの松と告人月白く出れば清きこゝの秋風

見月

ちるくすとなきこゝの園もあつ月よさつくとて文は

静見月  
傳午月

八月十三夜人ののび

十五夜待月  
十五夜月  
きふらのの歌借り

天の原秋の月

十五夜月ののび

あつたねの月ののび  
あつたねの月ののび

あつたねの月ののび  
あつたねの月ののび

八月十五夜  
八月十五夜

あつたねの月ののび

この山は三つに里と名づくるは遠く年々其の境  
より秋葉の高れ露の月満ちてゆくは何せん  
我々の秋の中をよつらむはかのさゆ月あを  
あせたるは只る身をもさへえんは秋の  
貞徳の柿園と名づくるは白川の亭よりよ  
ゆりて

この山は三つに里と名づくるは遠く年々其の境  
より秋葉の高れ露の月満ちてゆくは何せん  
我々の秋の中をよつらむはかのさゆ月あを  
あせたるは只る身をもさへえんは秋の  
貞徳の柿園と名づくるは白川の亭よりよ  
ゆりて

この山を類して秋と名づくるは

嵐山

よもや秋の草もあはれ山月の極も雲は  
萬治二年八月十五夜小狭也屋よりを詠ひて

徳大寺内大臣實経公

唐澤池眺望水の面れ光ももてはるは月よりの唐澤池

花山院前内大臣定誠云

詠や池のつら唐澤は光ももてはる梅のよは月

飛鳥井從一位雅章卿

なほとよみ申の秋乃水晴て月よけらるる廣原の池

雅波権中納言宗量卿

あらあけ月よみあててあけき光さうしきる廣原の池

山科参議言行卿

あはあていさうの秋も秋名も廣原の池の秋

飛鳥井中將雅直朝臣

池のあけ水若くあけあてていさうの秋もあは廣原の池

うらやうあていさうの秋もあてていさうの秋もあは廣原の池

松平丹後守光茂朝臣

さ波の数よとあてて月秋のあは水もき廣原の池

隠士長孝

けあつのはらとあてて月秋のあは水もき廣原の池

月よあてていさうの秋もあてていさうの秋もあは廣原の池

在明月

折のささきあはる菊の花はらうは廣原の池

あはらうあてていさうの秋もあてていさうの秋もあは廣原の池

月恭風



古寺月

若くはよふら花の古寺に昔はき月夜は  
かへその歌もくこくしれくくも秋の月  
あつ寺の歌もきこの歌はよく出た松原の月夜  
雅皮めらもくたも月の歌はし柳月の中はゆりて  
あつても拂りぬ海はくくく昔はくくく月夜  
あつた月も昔はくくく月夜はくくく月夜  
あつた月の歌もくくく月夜はくくく月夜  
あつた月の歌もくくく月夜はくくく月夜

園月

甚名宅月

閑居月

水郷月

月前草

月前萩

月前木

月前雁

月前鴨

月前虫

唐の所の名は松原昌之末下順廣の末下加藤合

あつたの志もくくく月夜はくくく月夜は

起つた萩もくくく月夜はくくく月夜は

散るる萩もくくく月夜はくくく月夜は

くくく月夜はくくく月夜はくくく月夜は

くくく月夜はくくく月夜はくくく月夜は

くくく月夜はくくく月夜はくくく月夜は

くくく月夜はくくく月夜はくくく月夜は

くくく月夜はくくく月夜はくくく月夜は

さうめい  
こまのり  
をま

月前同鐘

おとあけ月よりのあまのたのしみは誰かきしめさせ  
袖のあけそよあけさうよ月おちらばあき喰らうぬ  
月よ我袖のつぎうい眼さかひあまのあまのあ  
とせし心移るよりのあまのあ月よかきあまのあ  
思ひあけあ眼さあけさうよ月よなをい  
うぬぬ誰里さうかきさう方への袖の月影  
桂井のおりんさうよや又秋のあまのあ月の影

月秋友

名那月  
月多秋友

せうれつりる美空の友なれあをさうりあ秋の月影  
誰かよきあまのあさうい掃射の月の光さ  
ちのりあお花さよわらあのをあまのあ月影  
花さういあまのあ袖さうい浮きのあはれ  
なうしれあ自分さうの月影さういあはれ  
さうあけああまのああまのああまのあ  
山さういああまのああまのああまのあ  
あまのああまのああまのああまのあ

湖上雁

雁

鴻雁来  
作字

霧

堤上霧

霧隔山寺

擣衣

擣衣到晓

うきうきおぼろしきとてまはれ地はなほくち花も石の玉も

あはれむもあはれむもや垣をらん藤田の杜の秋の夕霧

うきみえり池のつゞみのあきといふ秋の夜の霧

船の舟もつゝの堤路へくさき音もひびく人となりし

とりの火の尾上の霧よこのりの白洲の法の花の夕霧

うら衣かきく着て打もぬ家も花は花なりぬと

よ秋の神よとてや洲にぬるあ おきむ麻の衣

杖をききとるあきなりてつらきとあ打もぬあき衣

佳句百十四

野亭擣衣

野徑鷄

小狭野屋をきく ながら 那らりやあはれ

菊

九月九日

寺陽よ橙傍の正随庵のぬりより菊は路なりて

きけぞの野もくさきとてひききとるあき衣の夕霧

ふさうあきのあはれと池のあはれ浦風をく新橋なり

あはれ身をいひてよあはれ秋風はあはれとあきあき

谷川よあきとあきあはれと白洲よあきとあきとあき

あはれとあきをかきん梅よりあはれとあきとあきとあき

あはれとあきをかきん梅よりあはれとあきとあきとあき

あはれとあきをかきん梅よりあはれとあきとあきとあき



白菊の志白あらしむわらふ人表ら子道に花の  
きり

浄之

菊よむ君ちと世にらとものを花の志若くつて  
まの志む袖をたはて衣とふと踏あまの菊の志  
咲より子世の志ける白菊の志ける枝の菊の上の志  
きりひるまをれ中あらしむわらふ人菊の花の色

菊の花ののこころ

桂よりゆきこれ綴のうらむに花ちよるせの白菊の志

小狭野をうけて菊の

咲より花をれをのこして我思のね子世に菊の志  
生ゆふ深き叶のゆきとに花を木末の秋志の里  
非代をいさ白をれをのこして花の志ける  
くれなゐの志をりてふ人の志をりて花の志ける  
これよりまを志す古より花の志ける  
り花をりてふ人の志をりて花の志ける  
九月の頃花を并從一位さくの屋よ入を志す人

墨黄紫

紅葉

紅葉交松

古郷紅葉

名所紅葉



桂雲集類題

冬部

初冬

あき夜下をさきみひをきわとふはあきく流使あり

神せ月照るま露のさきわも枝はし向守虎の川之

時雨

しるあきもきくさくはあきよはしあきとさるる秋年月式

朝時雨

うきさやうの朝時雨しるはあきくはあき初志之秋

夜時雨

あきしるまはあきくはあき初志之秋

閑路時雨

あきさうくはあきくはあき初志之秋

桂雲集四十七

瀧邊時雨

下流のあきくはあき初志之秋

山泉時雨

はあきくはあき初志之秋

枕上時雨

あきくはあき初志之秋

落葉埋路

はあきくはあき初志之秋

落葉定深

あきくはあき初志之秋

十月の法華田の神明の社にて

秋の月照るま露のさきわも枝はし向守虎の川之

霜

あきくはあき初志之秋

禁中夕霜  
山家夜霜  
閑庭霜

夕霜の如きもの如きもの  
流枕わづらひと  
とみ今枯葉の秋も  
くふり又垣のひは  
此の多しなほ枯葉の秋も  
神也月束つもの  
冬枯の多しなほ  
おつと守字は

冬嶺雲

冬嶺の多しなほ  
おつと守字は

桂雲 四十九

詩歌正名

寒樹交松  
寒草  
寒草終残  
山嵐吹寒草  
寒草霜

雪の内は  
ちうは  
枯るう  
寒草終残  
山嵐吹寒草  
寒草霜

朽ぬこころもさかたにわらわら枯れぬのよき初祀  
かの里のまねこそ花よみくはるまゝあねは志づき  
うらみこふ又も孫の守りたきよもさかたにわらわら  
寒草帯霜 咲てゆく消ぬまのたけは けしきよき谷は陰草  
双林寺よりし歌よみ傳へし

寒草  
江寒草  
山里は凡の村花をばかへてくらわんきと海は枯ゆ  
花もさかたにわらわらみくはるまゝあねは志づき  
枯れぬまのたけは けしきよき谷は陰草

桂雲 五十一

水郷寒草 誰かめくまゝまゝさくらんがけしきよき谷は陰草  
氷 消きてゆくあねは志づき けしきよき谷は陰草  
池上氷 けしきよき谷は陰草 けしきよき谷は陰草  
池水半氷 よきまゝあねは志づき けしきよき谷は陰草  
井邊氷 とけぬまのたけは けしきよき谷は陰草  
箕氷 けしきよき谷は陰草 けしきよき谷は陰草  
雨後冬月 けしきよき谷は陰草 けしきよき谷は陰草  
山寒月 けしきよき谷は陰草 けしきよき谷は陰草

寒山月  
河冬月

下折の音はさう月影を映さう所なる雪はしら  
花は散るをみよのれきさ吹流れ月如雪けり  
冬枯のさらば吹流れてさう上も月をけり  
新らう水よりさう夜は此回上川の月如くあり  
まよりし樹の影はさうさう法蓮河系冬乃の月  
新らう水の上の影はさうさう月を照らす冬川の水  
さよふの影の丁波の影さうさうさう人か神は浦波  
ゆくの影の影はさうの沖波は月を照らすとさうを  
注五十一

千鳥

夜子鳥  
浦千鳥  
写子鳥  
水鳥

境凡千子鳥はさうさうさうさうさうさうさうさう  
いとさうのかねさうさうさうのさうさうさうさうさう  
沖波はさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
浦はさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
濁さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
人か無さうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
宿らうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

月並水鳥

夜水鳥

蝶やそい麻いとう新し川よ又やまるとも踏れ猪の  
霜よふた松も此岸の泣くを岸の入江のあられ村を

水鳥知主

池波如きよる神さなれて身よりわらう響れまを  
流きよるひきの命れきうらるあられ波の氷なるは

綱代雪

芳野川花とあぬてし君さきき行る春のひを  
あうねるあをらしきあも愛のよふあをかうらる響れま

夜霰

小秋月も簗から袖の月影もぬねああたるふまあぬか  
とみ今もあをらしきあも愛のよふあをかうらる響れま

篠上霰

小邊原まきの別ちのうきあひまよあまきとあぬか  
月うらよ雪もあも愛のよふあをかうらる響れま

雪

雪の日白川の長雅ゆらに下りりて  
あもふらふまきのあも愛のよふあをかうらる響れま

のう

あもふらふまきのあも愛のよふあをかうらる響れま  
あもふらふまきのあも愛のよふあをかうらる響れま

あもふらふまきのあも愛のよふあをかうらる響れま

長雅

月雪よとひ昔なみのいかにけりし白川の波

うき海

山初雪

朝雪

夕雪

初めて人波白川乃月雪とけりし老の筆もはれて  
白如如雪と一筆の友夜中もかすくふ天はうき  
太極を如如と川のをけりて朝日まきこぬれ初雪  
初をよとあうあうのうき雪をれ初めりし白雪  
泊瀬山とくく初たりし白雪如如を告ぐ入水のうき  
世に如如雪とけり初と雪雪と入水の初初雪と定雪

鳥雀群飛欲雪天

夕月映雪

月映雪

深夜閉雪

連峯雪

河雪

夕月如如とけり初雪とよけりし老の筆もはれて  
白如如雪と一筆の友夜中もかすくふ天はうき  
太極を如如と川のをけりて朝日まきこぬれ初雪  
初をよとあうあうのうき雪をれ初めりし白雪  
泊瀬山とくく初たりし白雪如如を告ぐ入水のうき  
世に如如雪とけり初と雪雪と入水の初初雪と定雪



浦朝雪

遠村雪

山家雪

閑居雪

庭雪厭人

雪埋竹

秋雪

常盤木雪

鷹鳥狩

雪中鷹鳥狩

野鷹鳥狩

炭竈

嶺炭竈

冬枯の草乃れよの白雪もさうもねむりわづら松  
 とよ人を待たぬと云う梢に結て誰かも雪はか  
 却人ともぬきぬの物さうも結て余は雪は松  
 人のま枯ぬと危の事もあはれはくしてよは白雪  
 さうかしてとらぬとつらぬとさうも結て誰かも雪  
 晴て又雪をまけり村雀あつてさうも結て誰かも  
 子鳥ある陰さうもさうも結て誰かも雪はか  
 かきこじさうも結て誰かも雪はか

里人やの雨れさうも結て誰かも雪はか  
 共ぬるは雪をまけり村雀あつてさうも結て誰かも  
 狩衣まけりぬの物さうも結て誰かも雪はか  
 あらぬと云うとらぬとつらぬとさうも結て誰かも  
 雪のまけりぬの物さうも結て誰かも雪はか  
 枯のまけりぬの物さうも結て誰かも雪はか  
 さうも結て誰かも雪はか  
 雪積の山も雪はか

炉火

炉邊雨後

炉邊懷旧

禪樂

冬梅花

歲暮

心もよも冬を長風は信りしと今も昔も煙火燈火  
 よもやうに清らに思ふねえと大い思ふは頼みあふ  
 消われぬを思ふ数も思われて圓の昔は心の垣火  
 夢まよふとて空のうらた末しよるも深き神の空  
 小も是の神々の小藪うらた神代乃昔今うらた  
 霜もよも神の心のうらたうらたもわく笹の葉  
 けよ又も菊のうらたも咲花のうらたも白うらたの梅  
 うらたより思ふて思ふ心のうらたも吹くよも年の無  
 世に云 五十五

之れは初年かよふりか梅梅かかたつてははくひる約ハ  
 四の時のうらたとして定めをい教て老れれはなまじ  
 別とて老とていふやと教このあむさのうらたは  
 母れれ来とてすみの鏡とて志ねぬは教むとねかハ  
 教きとて今年も老のうらた鏡雪とて波の教むとねわ  
 他人の宿のうらた切火のあむりもまじく年を思ふ  
 絶くの宿の燈をそねとて年をねか教むとねは  
 宿のうらたうらたもあむらたの候もまじく年を

表を待たず木の枝も花もいへば春を催す

冬枯のよみ紫花の白を春を催す

りいやく煙もかきも西歌の春の節あらしの煙あり

海邊歳暮

除雪の下待りてあの内へ春の節あらしの煙あり

歳暮梅

冬の日

冬雲

雪のふりしつらさるるをわく雪のふりしつらさるる

冬川

冬分の一と笑や梅の河内とあやまれば雪はあやま

山をぬき朝

あ人の外あらしの煙紫花の白を春を催す

山をぬき朝

冬川

冬雲

歳暮梅

海邊歳暮

冬の日

桂雲集類題

志部

志

初志

忍志

忍久志

物持り方ありともへんかえあつても甲外志の  
まきとらやして未だ敷くとあまの一本此志の深き  
うとけし夕此神の人あまの思をてあまの志は小  
ままなきはあまのまはあまの思はあまの思  
あまの思はあまの思のまのまの思はあまの思  
あまの思はあまの思のまのまの思はあまの思

忍淡志

初尋縁志

祈志

祈身志

涌るものなり人の業をせよあまの水はまがみ  
何れは年月かして思はれん思はれんあまの思  
つめはあまの思はあまの思はあまの思はあまの思  
あまの思はあまの思はあまの思はあまの思はあまの思  
あまの思はあまの思はあまの思はあまの思はあまの思  
あまの思はあまの思はあまの思はあまの思はあまの思  
あまの思はあまの思はあまの思はあまの思はあまの思  
あまの思はあまの思はあまの思はあまの思はあまの思



別恋

志はくしく思われ月の影をのこ洞の神もとあはれも  
ききあつぬ神をたまらして別れ乃縁をたもたれ地所ん  
こののわら琳子小倉まううわねね頼の務まじけ  
乃よあつたをういばとの起て行んういねね件をま  
あやうよの元よいのゆるんぬれぬをいさくくたの  
よりまらふれを頼も梅麻うあまきまはすあつたは  
獨のこ園の板すの月とまを人の心はあねね昔の  
うらまきまをうらまきうらまきうらまきうらまき

桂雲 五十九

後期恋

逢は増恋  
遇不逢恋

顯恋  
寢恋  
思  
斤思  
隔遠縁恋  
忘恋  
恨

面影いささうねねいささうらまきうらまき  
今いささうらまきうらまきうらまきうらまき  
志くく我幾々うらまきの松内うらまきうらまき  
花び葉月をたもたれなまをうらまきうらまき  
あま事のうらまきうらまきうらまきうらまき  
あま垣のうらまきうらまきうらまきうらまき  
うらまきうらまきうらまきうらまきうらまき  
うらまきうらまきうらまきうらまきうらまき

互恨恋

月糸恨恋

絶恋

恨絶恋

冬恋

冬逢恋

旅恋

光後恋

寄月恋

寄月別恋

寄月愛恋

去るうこねに海成誓の信里れきくはか浦波  
 牙をくゆる魚をれを恨しひをね神にまの月  
 神のうにねるね志重れ浦波のをささるるよと言  
 いと女川のさねねと志重れちのさかみ浦波に  
 妹のねとねね波みつとさかみの浦波を  
 里におれて独やもる夕暮り海牙とる葛花を  
 とのねと枕の歌と暮さて寝よとるさかみの  
 梅うちのいとれひかみ水のしんか中へ結を

妹よ家那の山に後らぬ歌よとるさかみの枕をさか  
 むとのさねねとつたかじのよとる家人よかき  
 浪のこあまのりな家りそあて旅よあね志重れ  
 のあてり月糸柱の中へおとるさかみの浦波に  
 今もさかみの浦波のひなをれとるさかみの浦波に  
 かきをさかみの浦波のひなをれとるさかみの浦波に  
 とあてり人よとるさかみの浦波のひなをれとる  
 さかみの浦波のひなをれとるさかみの浦波に

寄風恋

はらわたと思ふあつみ吹風のまよふもよめは元  
く一人さるるね宿の侍よりかきつゝあな  
の松風

寄雲恋

あなまのよもひ夕あつみのあけなき  
あつみくさるるあつみくさるるあつみく  
さるるあつみくさるるあつみくさるるあつみく

寄雨恋

あつみのよもひ夕あつみのあけなき  
あつみくさるるあつみくさるるあつみく  
さるるあつみくさるるあつみくさるるあつみく

寄橋恋

あつみのよもひ夕あつみのあけなき  
あつみくさるるあつみくさるるあつみく  
さるるあつみくさるるあつみくさるるあつみく

桂雲 六十一

寄鳩恋

あつみのよもひ夕あつみのあけなき  
あつみくさるるあつみくさるるあつみく  
さるるあつみくさるるあつみくさるるあつみく

寄瀉恋

あつみのよもひ夕あつみのあけなき  
あつみくさるるあつみくさるるあつみく  
さるるあつみくさるるあつみくさるるあつみく

寄市恋

あつみのよもひ夕あつみのあけなき  
あつみくさるるあつみくさるるあつみく  
さるるあつみくさるるあつみくさるるあつみく

寄草恋

あつみのよもひ夕あつみのあけなき  
あつみくさるるあつみくさるるあつみく  
さるるあつみくさるるあつみくさるるあつみく

寄草馴恋

あつみのよもひ夕あつみのあけなき  
あつみくさるるあつみくさるるあつみく  
さるるあつみくさるるあつみくさるるあつみく

寄木恋

あつみのよもひ夕あつみのあけなき  
あつみくさるるあつみくさるるあつみく  
さるるあつみくさるるあつみくさるるあつみく

寄木厭恋

あつみのよもひ夕あつみのあけなき  
あつみくさるるあつみくさるるあつみく  
さるるあつみくさるるあつみくさるるあつみく

寄花悔恋

あつみのよもひ夕あつみのあけなき  
あつみくさるるあつみくさるるあつみく  
さるるあつみくさるるあつみくさるるあつみく



寄鳥恋 斐ていあらしの 田舎さへはなしく 独りぬえよ  
 寄鳥仍恋 ちよとて ぬれよ けしこく せしむる ぬれよ 志らむ  
 寄虫恋 ありたの 出らる 病は 宿るす 我の 人を 秘中の 夢  
 寄衣恋 深く 物さし 志す 葉の 物志る 衣掛ひ せぬ  
 寄繪恋 ねの せく ぬれ けしこく せしむる ぬれよ 志らむ  
 寄笛恋 けしこく せしむる ぬれよ 志らむ せしむる ぬれよ 志らむ  
 寄車恋 先より ありし せしむる ぬれよ 志らむ せしむる ぬれよ 志らむ

寄水恋 我身こそ 波日さの けしこく せしむる ぬれよ 志らむ  
 寄棹恋 棹さし せしむる ぬれよ 志らむ せしむる ぬれよ 志らむ  
 寄笠恋 美とあらし ぬれよ 志らむ せしむる ぬれよ 志らむ  
 寄鐘恋 けしこく せしむる ぬれよ 志らむ せしむる ぬれよ 志らむ

桂雲集類題

雜部

嶺雲

関路雲

船中雨

塩屋煙

曉

曉寢覺

山

富士の雪の影

山に花の林のさかきまてまのむらうふ葉の白や  
いほぬあわむらむらも風傷てまてはねとねと此の園を  
去るまも此時あるまのむらうにさかぬ程も袖の浮を  
波のうねを舟の中へよねまきし狭くあるまのむら  
浦へのむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら  
祢貴まのむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

野  
関  
関  
橋

関屋昼

夏の世はあぬあつうつねもくも葉もあつたをさるん  
時よむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら  
昔ふらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら  
あつたまのむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら  
昔も神はあつたの衣もあつた雪もあつた白川の関  
月もあつたまのむらむらむらむらむらむらむらむらむら  
まのむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

河

山の小川に流るる水は川林の間にありて苔のま  
水月に来かたの川邊へ納涼するのありて苔の流し  
その水は人々の心を清くするに似たり

その水は人の心を清くするに似たり

たれ 町中の水も清くありて

水石契久

涼やかな水に流るる石川は清く水の中に来かた

別海路

立寄りし水の清くありて流るる水の中に来かた  
あそび船も清くありて流るる水の中に来かた

鵜嶋備前や後子伏えよとてあひゆるりて秋やかく河  
舟よとて雅波へりり流るる水の中に来かた  
の清くありて

秋旅

一秋よとてわが心も清くありて流るる水の中に来かた  
大橋自道伊勢の清くありて流るる水の中に来かた  
わが心も清くありて流るる水の中に来かた  
それよとて秋の月夜に清くありて流るる水の中に来かた  
松の清くありて流るる水の中に来かた

冬旅  
旅夏

旅宿

羈旅  
羈中夜

萬楓志ひの枯し夏旅よふれそとらふ山の山こえ  
古よのよりよき夏の園雪いおれり。旅も不破の山風  
夏旅よふれそとらふ。旅宿のよきなれ共  
あつものに梅うりふか。物山雪の秋旅の程おもひし  
月よき旅宿のよき。あつものに梅うりふか。旅のよき  
古よのよりよき。旅宿のよき。あつものに梅うりふか。旅のよき  
旅宿のよき。あつものに梅うりふか。旅のよき。あつものに梅うりふか。旅のよき  
あつものに梅うりふか。旅のよき。あつものに梅うりふか。旅のよき。あつものに梅うりふか。旅のよき

旅人渡橋

旅人休橋

山家

山家夕煙

山家水

山家鳥

旅人よのよき。あつものに梅うりふか。旅のよき。あつものに梅うりふか。旅のよき  
旅人の夏の山家。あつものに梅うりふか。旅のよき。あつものに梅うりふか。旅のよき  
山家のよき。あつものに梅うりふか。旅のよき。あつものに梅うりふか。旅のよき  
山家夕煙のよき。あつものに梅うりふか。旅のよき。あつものに梅うりふか。旅のよき  
山家水のよき。あつものに梅うりふか。旅のよき。あつものに梅うりふか。旅のよき  
山家鳥のよき。あつものに梅うりふか。旅のよき。あつものに梅うりふか。旅のよき  
あつものに梅うりふか。旅のよき。あつものに梅うりふか。旅のよき。あつものに梅うりふか。旅のよき

山家夢

きつしおね婿の松よ富守は唯我此のよるる夜  
のねしちかたのふゆしんをてしんちの着  
之改昔をのねて却のふく位侍も六月の以盤  
富もやともあひてのみは海乃ちうすつて

美歌 廿二日 神の夏をさきうへ位侍の舟の  
唯えは海思塵をのねてハ幅の位侍のちんはよ  
てははのちしんは

ういとう ねしおれそのみ乃男のよの夢海乃袖

ういとう

唯え

志のすのちも無なるか教を唱ひきき九章のやう  
又河内國磯長山より位侍の以上をうりりは

此の思ひのたうとをさる身に兵我うられまをさる

うい

唯え

そかのお思ひときひに山後の家の巻しと夜ふゆ家  
宇治の位侍の却つ清長一て 長雅

世をさるも思ひしをてす水の音松の巻う相とわけて

はなはたしくもなほなほとてしるすはなはたしくもなほなほとてしるす  
あまたの秋のよとてしるすはなはたしくもなほなほとてしるす  
とあつれにほし

世ながらちいほすとも水の方松の葉をのほすはなはたしくもなほなほとてしるす  
表ふふとあてしるすはなはたしくもなほなほとてしるす  
あつれにほし  
廣海にほし  
あつれにほし

あつれにほし

きつらぬおとどろきはなはたしくもなほなほとてしるす  
人乃あをんをほし

よる波のよれをほし  
高き船をほし

あつれにほし  
あつれにほし

あつれにほし



儀松

古砦志

松久友

香年久

名可松

鶴  
鳴鶴

立波の志多くは所をあれ浦にかくてくうう後の松原  
 古果 軒端の志をねたかふがその松久友は  
 素年名もは浦ちかむるの本もえ花と志を松久友は  
 志の又素十ううりより波の志はくはく松久友は浦松  
 神の位はくはく松久友の志はくはく松久友は浦松  
 場不もしもして素年名もは浦ちかむるの本もえ花と志を松久友は  
 この松原と志はくはく松久友の志はくはく松久友は浦松  
 十ううりより波の志はくはく松久友の志はくはく松久友は浦松

松水昌子のめいふと松久友の志はくはく松久友は浦松  
 と志のてしと松久友の志はくはく松久友は浦松

素年の志はくはく松久友の志はくはく松久友は浦松

二月末のしと松久友の志はくはく松久友は浦松  
 素年の志はくはく松久友の志はくはく松久友は浦松  
 と志のてしと松久友の志はくはく松久友は浦松

素年の志はくはく松久友の志はくはく松久友は浦松  
 と志のてしと松久友の志はくはく松久友は浦松



折しはあれまきまのまきまのまきまのまきまのまきまの  
二カの内よりあつて権佐の随・浦の内よりあつて  
まきまのまきま

折しはあれまきまのまきまのまきまのまきまのまきまの  
折しはあれまきまのまきまのまきまのまきまのまきまの

まきまのまきま

まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまの  
まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまの  
まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまの

まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまの  
まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまの  
まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまの  
まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまの  
まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまの

まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまの  
まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまの  
まきまのまきまのまきまのまきまのまきまのまきまの

しらぬ心折るも

あめいかにききおきぬ人なきうらたけきねい  
なうらたけ

かへ私のあまきさうのききあててあめいみくし

埜の中をすれぬ越てお毎の心は物そいひあれり

夏の中うらたけなひ・秋

よらういふ先の心めはこれ唯鏡のきゆり雲際

述懐

和方は浦や赤い心ぬく埜うあつと苦めいふしり物  
思ひきねの辰にきういふしりぬねせぬちの心は  
井上  
六十二

うらたけかへおかしな心はうらたけはうらたけ  
もゆりうらたけの中はあひいふ

このまはあひきあひきあひきあひきあひきあひき

逐日述懐

日まをながるるあひきあひきあひきあひきあひき

述懐非一

思ひねるお世にうらたけあひきあひきあひきあひき

とあ人のまはうらたけあひきあひきあひきあひき

老述懐

きうらたけあひきあひきあひきあひきあひきあひき

さあきあひきあひきあひきあひきあひきあひき

寄木述懐

くちの朽る水尾あよひの中へうさふ水あはれは泣き

寄身述懐

あはれは泣きあはれは泣きあはれは泣きあはれは泣き

萬治二年治生はまゝあはれは泣きあはれは泣きあはれは泣き

あはれは泣きあはれは泣きあはれは泣きあはれは泣き  
あはれは泣きあはれは泣きあはれは泣きあはれは泣き

懐舊

あはれは泣きあはれは泣きあはれは泣きあはれは泣き  
あはれは泣きあはれは泣きあはれは泣きあはれは泣き

夕懐旧

あはれは泣きあはれは泣きあはれは泣きあはれは泣き

夜懐旧

あはれは泣きあはれは泣きあはれは泣きあはれは泣き

夢

あはれは泣きあはれは泣きあはれは泣きあはれは泣き

憂喜同夢

あはれは泣きあはれは泣きあはれは泣きあはれは泣き

胸消是非

あはれは泣きあはれは泣きあはれは泣きあはれは泣き

思往事

あはれは泣きあはれは泣きあはれは泣きあはれは泣き

水無瀬屋御茶はみかゝり

徳とありてはては川氷と昔にうらみたるの徳  
 往事如反 心蘭てりえとわきみのよ一は徳とありては徳とありて  
 往事 淵茫 心蘭てりえとわきみのよ一は徳とありては徳とありて  
 無常 未の病のありては徳とありては徳とありては徳とありて  
 教友のありては徳とありては徳とありては徳とありては徳とありて  
 婦のありては徳とありては徳とありては徳とありては徳とありて

此の徳とありては徳とありては徳とありては徳とありては徳とありて  
 寄水 寄教 寄法 寄相 寄心 寄徳 寄徳 寄徳 寄徳 寄徳 寄徳  
 普門品 たりれぬまゝ年の教とありては徳とありては徳とありては徳とありて  
 我不愛自命但惜無上道

社頭曉  
社以松  
社以柳  
寄林神祇  
宇治のおく白川の白あし  
あけふあけふ白川の瑞雲  
共信神の五教をこころよしくしむ

わが心ゆくもまことに  
夜鳥のおもひの  
あけふあけふの  
神垣よその  
柳のまはる  
あけふあけふの  
神垣よその  
あけふあけふの

祇園社を納百首の中は  
氏神のその松の  
あけふあけふの  
今もこの  
春秋の  
神の  
あけふあけふの

あけふあけふの  
あけふあけふの  
あけふあけふの  
あけふあけふの  
あけふあけふの  
あけふあけふの  
あけふあけふの  
あけふあけふの  
あけふあけふの  
あけふあけふの

寄都祝  
社願祝言

社以祝君  
壽神祝

志き彼のうららのまのけかきり君とよきまのいそれ  
ちりらんかきり神と君りけのい百美代をあら  
よきまのいそれ  
ちりらん

桂雲集

侍隆彦菴詠廿日月和歌并序

曰海志のよ島の若浪の立波と流まう世の音の  
よれ八隅をさるるに志をむむの民乃るやとにきき  
胸懐せうさるるに志をむむの民乃るやとにきき  
古よるも難波の浦内吹はくつとつと江の草のみ  
そらうもそらうは必もむむの民乃るやとにきき  
そらうもそらうは必もむむの民乃るやとにきき

あつたに新緑をさるるに志をむむの民乃るやとにきき  
折るねるは新緑をさるるに志をむむの民乃るやとにきき  
もさるるは新緑をさるるに志をむむの民乃るやとにきき  
細川の流ぬるは新緑をさるるに志をむむの民乃るやとにきき  
あつたに新緑をさるるに志をむむの民乃るやとにきき  
そらうもそらうは必もむむの民乃るやとにきき  
そらうもそらうは必もむむの民乃るやとにきき  
そらうもそらうは必もむむの民乃るやとにきき  
そらうもそらうは必もむむの民乃るやとにきき  
そらうもそらうは必もむむの民乃るやとにきき

まよふもあらばと危すこゝちをいつゑかたむねのり高き海  
いそんは憚なきかゝもめり行進て一人の物なき思進退  
てハ糸のその拙を恥ふとて春のその園をたはな  
よらと秋の出の世もせ乃露も然る者もたのつらたれ  
理りたれをいひしとて人の情中ようさるるなり  
顯るゝものならし其こゝはよりのいふく

朝のいぢやまたたけその葉乃ちもたつこの  
月をいふなり

之宅良親八月廿日無形之私書序

まよふもあらばと危すこゝちをいつゑかたむねのり高き海  
いそんは憚なきかゝもめり行進て一人の物なき思進退  
てハ糸のその拙を恥ふとて春のその園をたはな  
よらと秋の出の世もせ乃露も然る者もたのつらたれ  
理りたれをいひしとて人の情中ようさるるなり  
顯るゝものならし其こゝはよりのいふく





さしあはれとてさしあはれとて得たところを成すは伊勢の  
浦乃あるれきとて纒一とてあはれとて物をもあはれけし  
かるとあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
源とてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
之を成るとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
て実を捨よとて何優劣ありとてあはれとてあはれとてあはれとて  
文を成るとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
伊勢の浦乃あるれきとて纒一とてあはれとてあはれとてあはれとて

方をとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
やるとしてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
らとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
うとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
しとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
明は慣うゆとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
る持あやとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて  
つきとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

ちんり富方とあふれしうらまはゆきもあやう志の  
らん方にあつし一冊の書きたるうらめしく減ぬ星ち又  
百とて雪のうら二十年はのまよなわくきられと月夜と  
きうと斗のうらひて狩黄門乃びうらぬのあより月を  
えんうのうらへあ乃きうとまよひ雪のまを別しうらめ  
隈なしうらむと今うらと記皇のりてあをいひゆきと  
うらめうらめかこ中志いけ郷のまうらめとまよひ  
道乃蒼よとらうらうらとまよひとまよひとまよひとまよひ

一ハちうと慶長の後え和乃酒よりと一ハ五十あはま  
とつきの御書をいへるに河の海のはいひのうらめとまよひ  
らうらめとまよひのうらめとまよひとまよひとまよひとまよひ  
きうらめとまよひとまよひとまよひとまよひとまよひとまよひ  
あつとまよひとまよひとまよひとまよひとまよひとまよひと  
又とまよひとまよひとまよひとまよひとまよひとまよひと  
とまよひとまよひとまよひとまよひとまよひとまよひと  
すといあはれとまよひとまよひとまよひとまよひとまよひと

谷の水も流さず無乃と云ふまのうみりさか風雅の時と  
て詠吟今あるまはるるや久方の雲井乃庭みさりの  
洞いらりまぬり天のくも鄰乃国京の寺の塔影乃  
名物のとれし言の塔のむねをそくそ実校きそく  
なりかきまをぬくぬめつあまそくねら海のうれしとき  
け時を候しおほきなされとがまの席とけいあけまの  
傍よあやよそのむねしけいしそくまのうり龍作の  
いよ一遊仰る大君の月よよまをる題を撰りそれ

う中よいとも無あつる事なれは新古今の葉なるとい  
新勅撰をまゝく入しむる事の一句をこらむらとり  
秋もをゆよのむねしそくまのうり龍作の  
のころいよと十一文字をまらちる所のま乃題目  
まらちる一彼御のまをそくまのうり龍作の  
あめつ時をまらちるまらちるまらちるまらちる  
まらちるまらちるまらちるまらちるまらちる  
まらちるまらちるまらちるまらちるまらちる  
まらちるまらちるまらちるまらちるまらちる

八月中の十日よりして  
とらふ事あるなり

人のはあはれ後々名所の記

絵—のしるべき事にはかぶる—おのづか  
なう刀も物もしてしり—こもさる事  
乃其の乃其の—おのづか  
とらふ事あるなり

こらふ事あるなり  
れははらりしあしはち  
—きらぬあはれなり  
りて小柑子栗乃ち白も  
く尾二二の白も  
きらぬあはれなり  
らのあしはち  
とらふ事あるなり

傍にありてめでたきものなりよ芥子より酒跡をいりとな  
りてありていとおもひよんぬるはきよきひくもよ  
ららるるは土壌をゆつらひ細流をいりてなれお  
いんよとていんよきよのい水をまきとていんやう智し  
よの事漱とたりていんよとていんよとていんよと  
めでたきとていんよとていんよとていんよとていんよと  
いんよとていんよとていんよとていんよとていんよと  
いんよとていんよとていんよとていんよとていんよと  
いんよとていんよとていんよとていんよとていんよと

桂雲云八十四

伏見よとていんよとていんよとていんよとていんよと

いんよとていんよとていんよとていんよとていんよと  
いんよとていんよとていんよとていんよとていんよと  
いんよとていんよとていんよとていんよとていんよと  
いんよとていんよとていんよとていんよとていんよと  
いんよとていんよとていんよとていんよとていんよと

いんよとていんよとていんよとていんよとていんよと  
いんよとていんよとていんよとていんよとていんよと

玉ころり



とて一日あつちさやうにれいせきせおんよらうをいぬの  
りてをいひうていぬひよまきこころぬかしの枝れ節を  
いらもあつち孫主のいせしめの方もあつち  
と志のいぬれい志のいぬれい種もいぬれい志のあつちなる  
いぬれいなるあつちぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれい  
いぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれい  
いぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれい  
いぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれい  
いぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれい

むすも傍又作りて今なんしききあふとらあひのいぬれい  
いぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれい  
いぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれい  
いぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれい  
いぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれい  
いぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれい  
いぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれい

言井

かゝるれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれい  
かゝるれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれい  
かゝるれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれい  
かゝるれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれい  
かゝるれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれいしぬれい



道通

あはれなりし世のまはりの花をばりてはきりし花のうらみ  
きりし花のうらみはきりし花のうらみはきりし花のうらみ

長好

あはれなりし世のまはりの花をばりてはきりし花のうらみ  
きりし花のうらみはきりし花のうらみはきりし花のうらみ  
あはれなりし世のまはりの花をばりてはきりし花のうらみ  
きりし花のうらみはきりし花のうらみはきりし花のうらみ  
あはれなりし世のまはりの花をばりてはきりし花のうらみ  
きりし花のうらみはきりし花のうらみはきりし花のうらみ

註  
長好

あはれなりし世のまはりの花をばりてはきりし花のうらみ  
きりし花のうらみはきりし花のうらみはきりし花のうらみ  
あはれなりし世のまはりの花をばりてはきりし花のうらみ  
きりし花のうらみはきりし花のうらみはきりし花のうらみ

玄井

あはれなりし世のまはりの花をばりてはきりし花のうらみ  
きりし花のうらみはきりし花のうらみはきりし花のうらみ  
あはれなりし世のまはりの花をばりてはきりし花のうらみ  
きりし花のうらみはきりし花のうらみはきりし花のうらみ

道通

あはれなりし世のまはりの花をばりてはきりし花のうらみ  
きりし花のうらみはきりし花のうらみはきりし花のうらみ  
あはれなりし世のまはりの花をばりてはきりし花のうらみ  
きりし花のうらみはきりし花のうらみはきりし花のうらみ

らうらうよそくもまのそま令なうたうお花の志いあ  
葉枝はあやめいこの秋はよらあはるよ秋虫のそま  
重陽よそめいこの菊のけうく花をきううさうね垣の  
乃えいこの菊いこの菊いこの菊いこの菊いこの菊い  
うたはたのそまをきううけうくこの菊いこの菊いこの菊い  
以歌よこの菊いこの菊いこの菊い

長好

玄升

子安花いこの菊いこの菊いこの菊いこの菊いこの菊い  
叶はたのそまをきううけうくこの菊いこの菊いこの菊い

長好

あはれいこの菊いこの菊いこの菊いこの菊いこの菊い  
早もねは菊いこの菊いこの菊いこの菊いこの菊い  
あはれいこの菊いこの菊いこの菊いこの菊いこの菊い

長好

寛文三年九月下旬

修学のため又常陸北園よりなる合脱法一

よあしから 刻并款五そ

筑後山志々木直法と思入のいさくなくさきうら  
よあしからなる事柄のねよりいさくなくさき  
あしよちえゆきやうそく東強乃道の果やうとあ  
んいよはくさうは備りねきあ乃浦の波乃まわるといさく

桂雲八十九

しんくさういせいせんはねさるるやあしからなるさき  
よも積てしんくさういせいせんはねさるるやあしからなる  
けいせいのれれお細さるるやあしからなるさき  
はくさくあしよちえゆきやうそく東強乃道の果やうとあ  
あしよちえゆきやうそく東強乃道の果やうとあ  
よあしからなる事柄のねよりいさくなくさき  
あしよちえゆきやうそく東強乃道の果やうとあ  
あしよちえゆきやうそく東強乃道の果やうとあ  
あしよちえゆきやうそく東強乃道の果やうとあ  
あしよちえゆきやうそく東強乃道の果やうとあ

おしやうれおとく神のまゝしきまはしりておとくは

万治四年二月下旬

Wakayama Prefecture, Sakai City, Sakai Shrine

万治元年一月五日の夕小橋舟をさしつゝあはれぬら  
ふちりて

すゑのしきおとくはあはれぬら  
おとくはあはれぬら

おとくはあはれぬら

小倉の事よそら人のあはれなるさおのまゝえ下のねり  
あはれぬらあはれぬら

ちりらとよき音の小念のまゝいり一あはれぬら  
おの川の音いりいり

おの川の音いりいり

池の音いりいり

おの川の音いりいり  
おの川の音いりいり

いぢあふ  
書きた月影のついでに  
おぼろげな月影のついでに  
おぼろげな月影のついでに

おぼろげな月影のついでに  
おぼろげな月影のついでに  
おぼろげな月影のついでに

桂雲 九十一

おぼろげな月影のついでに  
おぼろげな月影のついでに  
おぼろげな月影のついでに  
おぼろげな月影のついでに  
おぼろげな月影のついでに  
おぼろげな月影のついでに  
おぼろげな月影のついでに

飛鳥井雅直御片を悼め歌詠

あふらうのたうけきとけしよに成るかふこしこいひのつら  
彼の成るのよき成を拜れ素に口之位らの成るよき  
はの林よりその幾坂も成るこし一たははらひと成る  
常中成れ成しよた和成乃成成てりし成業の徳に成  
此成の縁よ成らうて成成乃成成中人の中成成の成  
ものよ成り成れ成成よ成なるこ成成成の成成成成の成  
お成らう成成成成父成成相の成成成成ら成成成成成

とらうてその事かの成成中つら成成成五十の成成成成  
成成成成成成成成成成成成成成成成成成成成成成  
中成乃成成成成成成成成成成成成成成成成成成成  
成成成成成成成成成成成成成成成成成成成成成成  
成成成成成成成成成成成成成成成成成成成成成成  
あ成成成成成成成成成成成成成成成成成成成成成  
一た成成成成成成成成成成成成成成成成成成成成  
成成成成成成成成成成成成成成成成成成成成成成









Handwritten text in a cursive script, likely a continuation of a letter or document. The text is written in a fluid, connected style.

Handwritten text in a cursive script, possibly a signature or a specific address line.

Handwritten text in a cursive script, enclosed in a rectangular border. The text is written in a fluid, connected style.

其終の長は真如族の如く

其の終の長は真如族の如く

春の初めは花の如く  
今も花の如く  
春の初めは花の如く  
今も花の如く  
春の初めは花の如く  
今も花の如く

其の終の長は真如族の如く  
春の初めは花の如く  
今も花の如く  
春の初めは花の如く  
今も花の如く  
春の初めは花の如く  
今も花の如く  
春の初めは花の如く  
今も花の如く  
春の初めは花の如く  
今も花の如く



て以統扇供佛者なるて動東歸之思を以て  
床よりして侍者の食を以ててててててて  
以てててててててててててててててて  
てて今このてててててててててててて  
てててててててててててててててて  
てててててててててててててててて

承應二年 癸巳暮秋日  
桂雲 九十九

何某直重陸奥よりてててててててて  
和くのお茶乃ち花くをてててててて  
は堪えらぬててててててててててて  
はつてててててててててててててて  
宮内卿の女  
宮内卿の女  
末のたれま

てててててててててててててててて

武陽乃松

海よりきくはるききくはる松のまらきくはる

十符乃草

飯痛きしとの浦内さくぬくまのまらきくはる

鳥取川の切きくはる

鳥取川きくはる切きくはる

徒然の松板

きくはる松の徒然の松板

桂雲百

実方乃塚北岸

かきくはるしと志しれまの塚北岸

あぬその松

契つあぬその松のしと志しれまの塚北岸

詠暮春花五十首

あぬその松のしと志しれまの塚北岸



ふもかき遠なる花の香しうあまたれ里のき  
しうたしよきあそむく跡しうきくかたはの今も雲  
々のさうしうきあそむく跡しうきくかたはの今も雲  
跡しうきあそむく跡しうきくかたはの今も雲  
明しうきあそむく跡しうきくかたはの今も雲  
くたはの今も雲  
鳥跡しうきあそむく跡しうきくかたはの今も雲  
今も雲

桂雲 百二

ま回しよきあそむく跡しうきくかたはの今も雲  
春も今も雲  
さうしうきあそむく跡しうきくかたはの今も雲  
ゆもかき遠なる花の香しうあまたれ里のき  
あそむく跡しうきくかたはの今も雲  
大井川はよきあそむく跡しうきくかたはの今も雲  
さうしうきあそむく跡しうきくかたはの今も雲





右島田氏正伯隻林寺席一日前余因其  
宿題自戊至亥限剗製二十首其翌日繼  
製二十首如初輓近和歌家有條式不許  
龍古人秀逸語句及侵其所禁助辞但雖  
後世獨超深造自安其境者時或調停以  
通焉卒爾之際余學例恐讀者致疑聊  
記其由且因正伯所乞書以贈之

同席即真

桂雲百四

六の成者多き我はなれ人なるも一ぬをや此の下の伝

寛文七年姑洗下旬

古来の月とらゝの事をよみたる二十首

初らるるはる初らるるなりは現我の心松のきく其新  
らるるはるよきの年れ松の月光とら乃新とならん  
白川乃らるる寺も記ありてをらるるの月姑洗  
吹ふて月をええとら松の寺新なるの園の松也

山寺の音はる尾に鳴く夕の海はあまの暮れをきき  
あつらひに於てはるる寺の月乃下りせ  
古の山ははるる寺の音はあまの暮れをきき  
浦の寺はあまの暮れをきき  
いかにあまの暮れをきき  
月もあまの暮れをきき  
あまの暮れをきき  
あまの暮れをきき

山寺の音はる尾に鳴く夕の海はあまの暮れをきき  
あつらひに於てはるる寺の月乃下りせ  
古の山ははるる寺の音はあまの暮れをきき  
浦の寺はあまの暮れをきき  
いかにあまの暮れをきき  
月もあまの暮れをきき  
あまの暮れをきき  
あまの暮れをきき

慶安五年の夏我國の社よりしてなむの公歌  
百首のたふよあふ記

あし海よりひたりて雲をぬくならむるさしりか  
いふはふとふとふとふとふとふとふとふとふと  
しななきぬの氏神の力をまゝにせむたふとふと  
ふとふとふとふとふとふとふとふとふとふと  
尾あふとふとふとふとふとふとふとふとふと  
先世の善もあまふとふとふとふとふとふとふと

桂雲 百六

松風の音りくさるあふとふとふとふとふとふと  
志の深き乃一ぬふとふとふとふとふとふと  
神の言をせむねの成あつてわたりつらわ方のぬい  
をくらぬらふとふとふとふとふとふとふとふと  
海よりぬれさふとふとふとふとふとふとふと  
れひつとふとふとふとふとふとふとふとふと  
てふとふとふとふとふとふとふとふとふとふと  
ふとふとふとふとふとふとふとふとふとふと



桂雲集序

望月氏名蕙友號長好後自改為長孝其先信濃人  
世逐什一長孝資性恬澹無他嗜好從幼能詠和歌  
至老不衰終極其精年十三詠名所蟲名所者舊跡  
勝地也蟲孝秋蛩也義取聞秋蛩感舊事為人所賞  
或得和歌近未解其義例問而後詠之及出乃即歷  
卷獨超自然固爾然方其勉勵刻苦則百之千之嘗  
坐樓上讀和歌掌故偶鴨河暴漲浸灌殆將侵牀傍

人款亦而纔知之年四十三棄金穀將其妻避喧塵  
于京北而倉村後隱于嵐山之東廣澤池傍自築一  
室號小狹屋猶言小白屋也然長孝伎高一時其  
隱愈深其跡愈顯衣冠好事相往來櫛比不絕若飛  
鳥井權大納言後一位雅章水無瀨參議後二位兼  
豐二公皆能退其貴以和歌締交一日飛鳥井公訪  
其室時正中秋天慳無月特貧幽興分題詠和歌長  
孝得嵐山公當時名家三歎稱善世以榮之以歌

有桂雲二字今集名以之最後以其地卑濕門人  
謀移居于京師長孝以元和三年丁巳生延寶八年  
庚申春三月十五日卒於是年六十四矣長孝和歌  
師松永貞德貞德愛其研覈不懈以古今和歌集祕  
訣及諸宗匠所建和歌式悉授之貞德所得本出于  
幽齋細川公厥後長孝傳長雅長雅傳長伯長伯傳  
長因長伯傳長收此集也享保十一年丙午京師人  
魚山以梓之命以廣澤輯藻是歲安永九年庚子距

桂雲序二

製孝年一百年先是鏤板既亡不知所在其他著述  
亦皆不可長收有志復鐫因取其家所藏及所他聞  
見悉補舊示脫漏部類分題其小引短序語涉重疊  
併與削之且改今名謂和歌能達性情以便佛曰長  
孝好在和歌此舉蓋追其冥福也集成送標條若干  
許語乞序遂書以代小傳是為序  
安永九年庚子三月

那波師曾撰

生志齋藏板



桂雲序三終

天明元年 辛丑九月發行

浪華書林

堺筋長堀橋半町北

增田源兵衛



五十一



